（第3種郵便物認可）　北日

H25年2月18日(月)

90年前の教訓 胸に

1923（大正12）年1月、登山家3人が厳冬の立山でさまよい、1人が死亡した「松尾峠遭難」から今年で90年を迎え、亡くなった登山家の母校、学習院大出身の有志が4月、登山家をしのぶ石碑がある立山町芦峅寺で「90周年祭」を開く。この事故は国内近代登山史上初の冬山遭難とされる。芦峅寺の住民らが開催に協力し、事故の教訓をあらためて胸に刻む。

（社会部・柵高浩）

富山日報（第三種郵便物認可）

彌陀ケ原の高原は
雄大な雪艇滑走場
立山を踏破すべく昨日來賀せる
槇有恒氏は快活に語る
大に心強い
實に得難い

きのふ來富の立山踏破隊の一行

立山踏破を目指し登山隊が来県したことを伝える1923年1月6日の富山日報

立山・松尾峠　近代登山初の冬山遭難

現場は弥陀ケ原近くの松尾峠。国内外で豊富な実績を持つ登山家の槇有恒さん、三田幸夫さん、板倉勝宣さんの3人がスキーを使って立山踏破に挑んだ。松尾峠を経て一ノ越を目指したが、猛吹雪に襲われ、引き返す途中で当時25歳の板倉さんが力尽きた。槇さんと三田さんは、立山町芦峅寺の山岳ガイドのルーツである芦峅寺案内衆の救援により、九死に一生を得た。富山日報（北日本新聞の前身の一つ）は1923年1月6日付で登山隊の富山入りを、同23日付で遭難発生などを報じた。

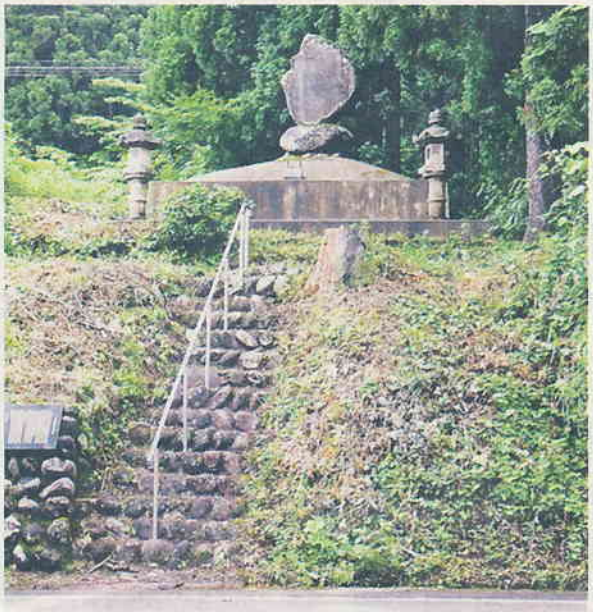
学習院山桜会と芦峅寺住民協力

4月に記念事業

アイゼン、ピッケルなど当時の最新装備を備えた経験豊富な登山家でも自然の猛威を前に手も足も出なかったことが浮き彫りになり、登山界に大きな衝撃を与えた。

板倉さんは、1897（明治30）年、東京の子爵、板倉家に生まれた。学習院高等科を卒業後、北海道帝国大に進学。スキーを活用した登山技術を磨き、いずれは山岳界を担うと期待されていた。

事故から2年後の1925（大正14）年、芦峅寺案内衆、板倉さんの母校の学習院と北海道大、槇さんの母



遭難した板倉さんをしのぶ石碑＝立山町芦峅寺

立山・松尾峠 近代登山初の冬山遭難

教訓 胸に

学習院山桜会と芦峅寺住民協力

4月に記念事業

の立山でさまよを迎え、亡くな登山家をしのぶ石碑がある立山町芦峅寺で「90周年祭」を開く。この事故は国内近代登山史上初の冬山遭難とされる。芦峅寺の住民らが開催に協力し、事故の教訓をあらためて胸に刻む。（社会部・柵高浩）

現場は弥陀ケ原近くの松尾峠。国内外で豊富な実績を持つ登山家の槇有恒さん、三田幸夫さん、板倉勝宣さんの3人がスキーを使って立山踏破に挑んだ。松尾峠を経て一ノ越を目指したが、猛吹雪に襲われ、引き返す途中で当時25歳の板倉さんが力尽きた。槇さんと三田さんは、立山町芦峅寺の山岳ガイドのルーツである芦峅寺案内衆の救援により、九死に一生を得た。富山日報（北日本新聞の前身の一つ）は1923年1月6日付で登山隊の富山入りを、同23日付で遭難発生などを報じた。

アイゼン、ピッケルなど当時の最新装備を備えた経験豊富な登山家でも自然の猛威を前に手も足も出なかったことが浮き彫りになり、登山界に大きな衝撃を与えた。

板倉さんは、1897（明治30）年、東京の子爵、板倉家に生まれた。学習院高等科を卒業後、北海道帝国大に進学。スキーを活用した登山技術を磨き、いずれは山岳界を担うと期待されていた。

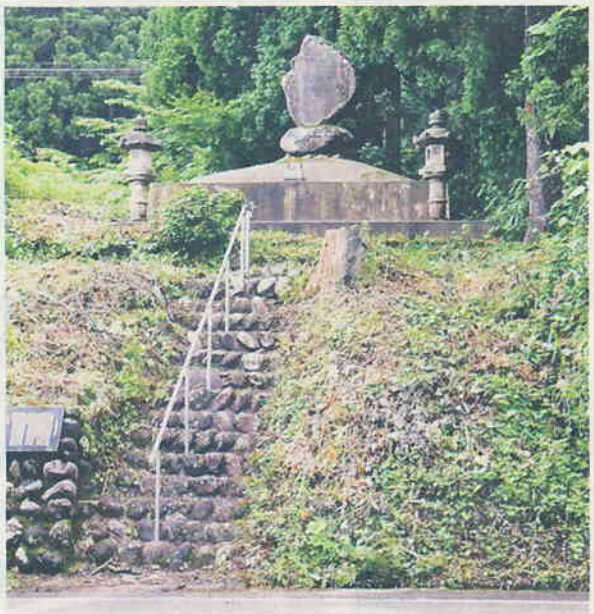
事故から2年後の1925（大正14）年、芦峅寺案内衆、板倉さんの母校の学習院と北海道大、槇さんの母校の慶応大関係者が中心となって、板倉さんの足跡を後世に伝えるため、芦峅寺に「遺蹟之碑」と名付けた石碑を建立。発起人のほか、芦峅寺案内衆21人の名が刻まれている。

58年には富山国体山岳競技の関係者として来県した槇さんと三田さんらが墓前祭を開いた。2人はともに平成に入って亡くなった。

2004年、学習院山岳部OBらが部の歴史をまとめていたところ、松尾峠遭難と石碑の存在を知り、芦峅寺を訪れた。破損が目立ち、芦峅寺の山岳ガイドや3大学の山岳部OBらが協力して補修。その後は毎年夏、関係者が石碑前に集まり、芦峅寺地区住民と交流を続けてきた。

90周年祭を企画したのは、学習院山岳部出身者らでつくる学習院山桜会（贄田統亜会長）。記念事業委員会（檜垣陽三委員長）を結成し、準備を進めてきた。

4月6日に芦峅寺のふるさと交流館で、芦峅寺案内衆や学習院山岳部の歴史を紹介するほか、立山の氷河をテーマに立山カルデラ砂防博物館の飯田肇学芸課長が講演。7日に90周年祭を行う。檜垣委員長は「事故の教訓を後世に伝えていきたい」としている。立山ガイド協会、日本山岳会富山支部が共催し、地元公共施設などにチラシやポスターを配ってPRに協力している。



遭難した板倉さんをしのぶ石碑＝立山町芦峅寺